

令和7年7月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

—徳富蘆花の墓石は御岳産—

明治31(1898)年、名作『不如帰』を著した徳富蘆花(本名徳富健次郎)は、昭和2(1927)年、60歳で亡くなりました。自然を愛した蘆花の思いを受け継いだ愛子夫人は、墓石を自然石で作りたいと考えていました。

昭和9(1934)年、愛子夫人は羽村市に住んでいた作家の中里介山に、自然豊かな奥多摩地域から墓石に仕立てる石を探し出してほしいと依頼しました。介山は市内御岳に在住していた知人のS氏に頼み、石探しが始まりました。S氏はあちこち歩き、いくつかの候補を挙げ、愛子夫人も見学に訪れて、御岳1丁目の払澤の漆窪という山中で台石が、払澤沢の清流の中から墓石が選ばれました。

選ばれた墓石は高さ約120cmのチャート製で、美しい苔に覆われて清浄な沢の中にひっそりと横たわっていた、と後にS氏は語っています。愛子夫人も気に入り、当時暮らしていた世田谷区粕谷まで墓石を運ぶことになりました。

しかし、場所は車道から急斜面を1km以上も登った所で、沢の中の石は2トンを超える大石です。S氏の奔走により、人夫を手配し、木道を作り、木馬に載せてやっと車道まで運び出し、トラックに積み込むことができました。あまりの重さに、途中の府中付近でトラックのシャフトが折れてしまうというアクシデントもありましたが、何とか無事に現地まで輸送することができました。

すぐに、蘆花の兄である徳富蘇峰(徳富猪一郎)の筆で「徳富蘆花夫妻之墓」と刻まれ、台石とともに建立されました。

墓石探しを頼まれたS氏宅には、愛子夫人からの手紙が残されており、感謝の言葉とともに「(前略)墓石刻字の儀、石質堅牢の上従ってもろき点有之、思はしくまゐりかね、不充分のできながらともかく昨夜にかけ運び入れさせ今日仕上げました。なかなか立派な石にて文字なきも可と存じられます。しかし水清き御嶽山麓恋しげにいまだなづまぬように見受けられます。(後略)」と書かれています。愛子夫人は昭和22(1947)年に亡くなり、同じ墓に埋葬されました。

蘆花夫妻の暮らしていた世田谷区粕谷の敷地は、蘆花が生前から「恒春園」と名付けていたことから、蘆花の没後昭和12(1937)年、東京市に寄贈されて「蘆花恒春園」という公園になりました。現在は附近の公園も含めて「東京都立芦花公園」と呼ばれており、蘆花の旧宅は東京都指定史跡となっています。園内の林の奥には蘆花夫妻の墓が残り、遠く御岳の山中から運ばれた墓石が建っています。

(文責 小島みどり)



墓石搬出風景（中央の石が墓石）



芦花公園内の蘆花夫妻之墓